2026WORLD ROWING UNDER19 CHAMPIONSHIPS REPORT 8 (8/8)

8月8日（土）

大会3日目、この日からFinal Aも行われることから、観客も増え会場は大きく盛り上がりを見せておりました。U19世界選手権日本代表のJW1x、JM1xは最後のレースに挑むため、集中して会場入りしレースに向けた準備を行いました。

JW1x Final D

スタートで真ん中レーンのパラグアイとインドが少し飛び出し、香港、日本、チュニジア、エストニアと続く。インドがレースを引っ張りパラグアイと日本、香港、チュニジアが続く展開となりエストニアは少し遅れ始める。500mの通過は、インド、パラグアイ、日本、香港、チュニジア、エストニアの順で通過。日本は3位とはいえ1位インドと1.27秒差で付いている。第2クオーターに入ると日本が伸びやかなストロークで少しずつポジションを上げ、パラグアイと並びながらインドを抜き去る。香港はここで少し遅れる。1000mの通過はパラグアイ、日本、インド、香港と続き、日本はパラグアイとほぼ並んで0.30秒差の2位。3位インドも日本と0.46秒差で続き、3艇でのトップ争いとなってきた。第3クオーターに入っても展開は変わらないと思われたが、インドが遅れはじめ日本とパラグアイの一騎打ちの様相となってきた。第4クオーター、パラグアイが後半の強さを発揮し徐々に引き離しにかかる。日本もスパートを入れ必死に食い下がるがその差は詰まらず2位でフィニッシュ。全体20位で大会を終えた。

1000m手前、パラグアイ（真中）、インド（奥）とトップ争いを繰り広がるJW1x 梶選手（立教大学）

JM1x Final C

スタートからAINと中国が飛び出し、アルゼンチン、クロアチア、ウクライナが続きそこから遅れて日本が追う展開に。日本も良いパフォーマンスを出してはいるものの、他国の圧倒的なスピードの前に付いていく状態が続く。500mは1位AINと7.98秒差の6位で通過。5位ウクライナとの差も2.46秒。第2クオーターも中々追い付けない苦しい展開ではあったが必死に踏ん張りを見せたせいか、先行するクルーとの差の開き方が緩やかになり、5位ウクライナとの差を徐々に詰め始めた。第3クオーター、ここで日本はさらに粘りを見せ先行するウクライナに肉薄する。1500mの通過はAIN、アルゼンチン、中国、クロアチア、ウクライナ、日本の順で、ウクライナとの差は0.83秒差にまで縮まってきた。ラストクオーター、日本チームの最後を締めくくるにふさわしいスパートを見せ、先行するクルーとの差を詰め始める。ウクライナはさらにペースを上げ捉えきれず。代わりにラストクオーターでペースが落ちた中国にぐんぐん迫り観客を沸かせたが僅かに届かず6位でゴール。総合18位となった。

1750m地点でスパートを入れウクライナ（写真右）と激しく競り合うJM1x佐野選手（岡谷南高校）

レース後は、艇を解体しボートメーカーに返却します。本日レースが無かったクルーが率先して手伝っておりました。

JM1x Final Cをもって、2026年U19世界選手権日本代表チームのレースは全て終了いたしました。今大会は、大会初日に3種目全てで予選（Heat）を突破する滑り出しから始まり、JM2xが毎レース激しいレースを展開しました。JW1xとJM1xは体格差が大きな外国勢にも果敢に立ち向かい粘り強く戦い続け、レースを重ねるごとにどんどん良いパフォーマンスを発揮しておりました。
これも、各所属チーム・水域で鍛え上げられたベースがあったからこそ出来たことだと思っております。そして今回世界の舞台で選手たちが肌で感じたものを、それぞれが各所属チーム・水域に持ち帰り、今後世界で戦い勝つためにはどのようにしていったらよいかを考えながら行動していくことで、各所属チーム・水域に還元してくれることを願っております。
今回世界を相手に力を尽くしてくれた選手たちは、すでに次のターゲットに向けて意識を切り替えております。
これからも日本ボート界が一丸となって世界と戦えるようご声援をよろしくお願い致します。
最後に今回の遠征にご協力いただいた全ての皆さまに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

「ご声援ありがとうございました」

～2026年U19世界選手権日本代表選手団一同～

左より、古田丈博（ヘッドコーチ）、JW1x梶ひまり（立教大学）、JM2x一瀬弥満登（若狭高校）、JM2x首田笙（富山国際大学）、JM1x佐野天里（岡谷南高校）、岸陽斗（トレーナー）、大同秀憲（コーチ）、中上仰（チームリーダー）